

奥田井遺跡発掘調査概要 I

大阪府教育委員会

卷頭図版1 調査区全景



巻頭図版 2 金剛山と調査区全景



序 文

奥田井遺跡は河内長野市の南東山間部に位置し、周囲は古代から中世の荘園開発で拓かれたと考えられています。遺跡は環境農林水産部による府営農村振興総合整備事業に先立って、平成19年に試掘調査を行った結果、発見されました。

奥田井遺跡は金剛山から流れ出る石見川が形成した渓谷のわずかな平坦面にあります。この平坦面の北側には河内と大和を結ぶ大澤道(現国道310号)があり、南側には高野街道にぬける間道(現府道河内長野千早城跡線)があります。今回調査区は二つの道の結節点に位置します。

大澤道は東高野・西高野・中高野の三街道が一本になる河内長野市の七ツ辻から観心寺を通って大澤峠へぬけ、五條に至る古道として知られます。また、高野街道にぬける間道は高野街道沿いの三日市と大澤道をつなぐもので、その途中に延命寺があります。奥田井遺跡はこれらの古道を結ぶ交通の要衝であったことがうかがえます。

南北朝期は南朝方が金剛山麓の千早城・国見山城などにたて籠もり、激しい戦闘を繰り広げたことが知られます。今回の調査で古代・中世の住居は確認されませんでしたが、中世以降の生産活動の一端を示す水田あとなどを確認しました。あわせて、縄紋時代の打製石器、南北朝期の土師質土器、瓦質土器、陶磁器などの多彩な遺物が見つかっています。とくに、南北朝期の中国製磁器は当時の交易を知るうえで重視できます。

本調査を実施するにあたり、地元の方々をはじめ、大阪府環境農林水産部、河内長野市教育委員会等々の関係各位に、多大なご協力を賜りました。厚く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政に一層のご理解・ご協力を賜りますよう、お願ひ申し上げます。

平成23年3月

大阪府教育委員会事務局

文化財保護課長 野口 雅昭

例　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が環境農林水産部の依頼を受けて実施した府営農村振興総合整備事業「河内長野和泉地区」に伴う、河内長野市鳩原地内、奥田井遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査番号は、09023 である。
3. 現地調査は、文化財保護課調査第二グループ副主査 西川寿勝を担当者とし、平成 21 年 11 月 16 日から平成 22 年 1 月 22 日まで実施し、遺物整理は調査管理グループ主査宮野淳一、同三宅正浩、副主査藤田道子を担当者とし、現地調査と併行してすすめ、平成 23 年 3 月 31 日にすべての事業を終了した。
4. 本調査の写真測量は、和歌山航測株式会社に委託した。撮影フィルムは同社において保管している。
5. 出土遺物及び記録資料は、本府教育委員会において保存・管理している。
6. 写真撮影および、本書の執筆・編集は、西川寿勝が担当した。
7. 発掘調査・遺物整理および、本書の作成に要した費用は、農林水産省の補助を受けた大阪府環境農林水産部と文部科学省の補助を受けた大阪府教育委員会が負担した。
8. 本書は、300 部作成し、一部あたりの印刷単価は、349 円である。

本文目次

序文	
例言	
第Ⅰ章 位置と環境	1
1節 地理・歴史的環境	
2節 調査経緯	
3節 調査方法	
4節 基本層序	
第Ⅱ章 調査成果	9
1節 1区・2区上層の調査	
2節 1区・2区下層の調査	
3節 出土遺物	
第Ⅲ章 まとめ	14

図版
報告書抄録

挿図・図版目次

図 1 周辺遺跡分布図	2	卷頭図版 1 調査区全景
図 2 調査区位置図	4	卷頭図版 2 金剛山と調査区全景
図 3 地区割図	6	図版 1 調査着手前と調査状況
図 4 土層図および遺構断面図	8	図版 2 1区・2区土層
図 5 上層遺構全体図	10	図版 3 1区上層・下層全景
図 6 下層遺構全体図	11	図版 4 2区上層全景
図 7 サヌカイト製剥片石器	12	図版 5 2区下層全景
図 8 出土遺物	13	図版 6 1区下層遺構群 1
図 9 実測遺物対照表	14	図版 7 1区下層遺構群 2
		図版 8 1区下層遺構群 3
		図版 9 1区下層遺構群 4
		図版 10 2区地山確認トレーンチ
		図版 11 出土遺物
		図版 12 出土青磁復元

第Ⅰ章 位置と環境

1節 地理・歴史的環境

a 地理的環境

奥田井遺跡は大阪府河内長野市と千早赤阪村の境、金剛山の北西山麓に位置する。金剛山は標高 1125m を測り、北西に石見川・天見川が流れ、深い渓谷を形成する。遺跡は石見川が形成した渓谷に沿った狭い段丘崖の平坦面に位置する。その標高は 280m 前後で、四方を山塊に囲まれた高所である。現在、平坦面に人家はなく、一面棚田になっている。

大阪府北部の六甲山地・千里丘陵、東部の生駒山地・金剛山地、南部の和泉山脈・泉州丘陵は、鮮新世(今から約 500 万年前～160 万年前)、もしくは更新世(今から約 160 万年前～約 1 万年前)に形成されたという。地殻変動で隆起した大地は、当初南北に圧縮を受け、東西にのびる山脈・丘陵を形成し、その後は東西に圧縮を受けて南北にのびる山地を形成した。金剛山はこの南北方向の褶曲と東西方向の褶曲の結節点で隆起を繰り返したもので、微地形は複雑に入り組み、地層は交差構造となる。その地表から深層までは領家帯の花崗岩類が基盤で、西側の山裾には大阪層群の砂礫層を乗せる。

このようにして形成された大阪の山地は、氷河期の終る 10000 年～9000 年前頃になると、温暖化して木々に覆われる。金剛山麓もコナラやブナなどの落葉広葉樹林が繁茂したと考えられる。さらに、大阪の平野部が海進で水没するおよそ 6000 年前頃から、照葉樹林(常緑広葉樹林)に覆われ、現在に至る。人々はシイ・イチイガシ・クリなどの実を採集しながら、山間部にまで足を踏み入れていったようだ。

このような樹林帯も戦後の植林で大半がスギ・ヒノキなどの針葉樹林へと変更され、その後の手入れが滞ったことにより、現在は山の荒廃が著しい。また、高度経済成長期には海拔 100m を超える高所をも切り開いて平坦化し、住宅開発が大規模に行われた結果、金剛山麓の景観も大きく変貌してしまった。

b 歴史的環境

金剛山は平安時代に弘法大師が金剛峯寺を開いたころに名づけられたと考える。それ以前は二上山以南の南北にのびる山塊を葛城山と総称していたのだろう。平安貴族の支持を得て密教文化が隆盛し、高野山詣での経路、修験道の道筋として遺跡周辺の高野街道や大澤道(五條道)にもぎわったと考えられる。

大澤道は東高野・西高野・中高野の三街道が一本になる河内長野市の七ツ辻から觀心寺・奥田井遺跡を通って、千早城・国見山城の下を大澤峠へぬけ、大和の五條に至る古道である。また、奥田井遺跡から三日市に至る間道は、高野街道と大澤道をつなぐ要路で、途中に延命寺がある。



図1 周辺遺跡分布図

観心寺はその前身の雲心寺が大宝元年(701)に創建されたと伝えるが定かではない。平安時代前期に空海の弟子実惠などによって伽藍が整備され、平安時代中頃には周辺の莊園化を推し進めていった。当時の観心寺莊園は十四にのぼると『観心寺縁起資財帳』にみえる。

鎌倉時代末、金剛寺・河合寺・観心寺などは反幕府勢力の拠点になった。古代よりわが国は顕著な城郭を建設することはなかったが、この時期には山岳を利用して小規模な砦を多数築き、これらをつないで防衛網を形成するあらたな戦闘方法を確立した。その結果、鎌倉幕府は城郭に籠る楠正成の軍勢を討伐することが出来ず、滅亡へと追い込まれる。また、室町幕府をおこした足利軍もたて籠った勢力に苦慮し、天皇家を二分する南北朝時代が長く続くこととなる。

奥田井遺跡は平安時代中ごろに開発された莊園遺跡か、鎌倉時代末の城郭形成期に開発された集落遺跡と考える。残念ながら今回調査では顕著な遺構・遺物が確認できず、結論は得ない。また、周辺にもほとんど遺跡が知られておらず、考古学的分析は遅れている(図1)。

室町時代以降になると、金剛寺の天野酒が有名となり、付近の水田でも酒米の生産が行われていた可能性がある。また、江戸時代には狭山藩が庇護した滝畑や天野山で茶の栽培がさかんだったという。今回調査でも茶畑を示唆する畝溝が確認されており、生業の一端が垣間見られる。

幕末動乱期に、川登り四ヶ村(鳩原・太井・小深・石見川)などの農民から射撃に熟練したものが80名ほど狭山藩に選ばれ、鉄砲組を結成したことが『鉄砲組勤番日記』によってうかがわれる。山間部の農民は鳥獣を獲るため、鉄砲に長けていたのであろう。遺跡周辺に居住した人々も、この鉄砲組に加わった可能性がある。嘉永六年(1853)のベリー来航時や、翌年のロシア艦船天保山侵入による堺浜警備に鉄砲組が徴集されている。

さらに、文久三年(1863)八月には幕府の攘夷決行と天皇の大和行幸計画に乘じ、天誅組の一派が京都から淀川を下って堺に上陸した。そこから西高野街道を南下して富田林に集結する。地元の義士を加えて、隊列を組んだ一行は観心寺の後村上天皇陵・正成首塚を詣でたあと、倒幕を企てて決起する。金剛山を越えて、五條の代官屋敷を襲い、高取城に攻め込むものの、結局は幕府方の藩兵に追い詰められて西吉野で壊滅する。おそらく、観心寺より奥田井遺跡を通って、五條を襲撃したのだろう。その後、賊徒とされた一行は河内への逃亡を阻止されている。狭山藩・尼崎藩・岸和田藩などの藩兵が1600名以上で大澤峠・千早峠・水越峠などを封鎖している。

天誅組にも見られた楠木正成を崇拝する動きは明治時代以降になるとますます活発化し、水分神社の整備や湊川神社の創建、楠氏墓石建立・楠公顕彰碑や城跡碑の建設などが行われるようになる。また、楠公にかかる遺跡参拝と金剛登山が組み合わされ、多くの人々を往来させた。

軍も戦捷祈願や凱旋報告のほか、行軍訓練に金剛登山を取り入れる。日清戦争後には楠氏遺跡里程元標や分岐道標が街道・登山道沿いに建てられ、探訪者の便がはかられるようになる。小学校への正成銅像建立運動は二宮金次郎像と共に昭和初年に始まり、15年頃がピークという。金剛登山は現在も府内小・中学校の学校教育のなかに継承されている。楠公に対する意識は変化したとしても、楠公祭は続けられ、観心寺参拝や金剛登山は現在に至っても衰えていない。

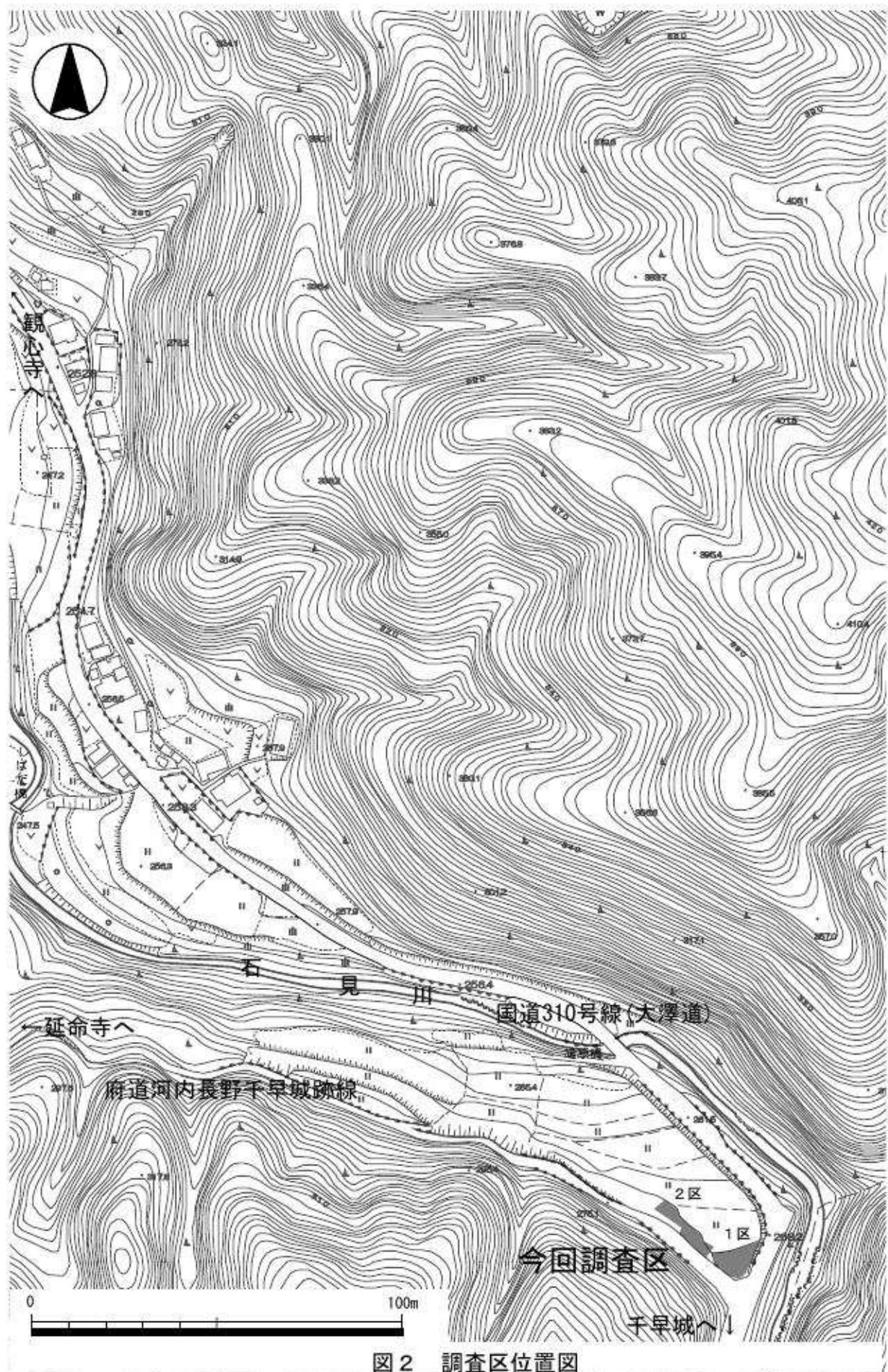


図2 調査区位置図

2節 調査経緯

奥田井遺跡は平成 20 年度に府営農村振興総合整備事業「河内長野和泉地区」に先立つ試掘調査で発見された。試掘成果によって、遺跡内では比較的浅くに遺構・遺物の埋没が確かめられた。事前協議の結果、農道建設部分とは場整備地域のうち、切り土部分については平成 21・22 年度に本調査を実施することとなった。

今回調査は遺跡の東部、大澤道沿いに設定した二ヶ所である。1 区・2 区とした(図 2)。1 区は東南のもっとも端にあたる三角形の水田で、247 m²ある。2 区はその西側の農道新設部分にあたる細長い水田で、153 m²ある。2 区の西側にも道路建設などが予定されており、これは平成 22 年度に約 850 m²の調査が予定されている。

現地調査は平成 21 年 10 月はじめに実施、翌年 2 月に終了した。遺物整理作業は現地調査と併行して開始し、平成 23 年 3 月末に終了した。調査地域は石見川上流の太井地区集落の地権者の方々が水利を管理し、代々水田耕作が継承されている。発掘調査は稲刈りから田植えまでの期間に実施できる面積を検討、表土を機械掘削で除去・仮置きして行った(図版 1)。

奥田井遺跡は近年まで遺跡の存在が知られておらず、これまで河内長野市南東部の高所でもほとんど発掘調査がなかったため、今回調査はこの地域を考古学的に分析する上で嚆矢といえよう(図版 1)。

3節 調査方法

大阪府教育委員会・大阪府文化財センターの発掘調査は調査区の位置を共通して表現できるよう、大阪府発行 1 / 10000 地形図を基準として 4 段階の区分を実施している(図 3)。第 I 区画は南西隅を基準として縦軸を A ~ O、横軸を 0 ~ 8 に区画する。奥田井遺跡は大阪府の東南隅に位置する C 6 区内にある。

第 II 区画は第 I 区画の南西隅を基準として 16 等分したもので縦 1500m、横 2000m の範囲である。奥田井遺跡は 15 区にあたる。

第 III 区画は第 II 区画を 100m 方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を 1 ~ 20、横軸を A ~ O に区分したものである。今回調査地は 1 区が 14L 区内、2 区が 15L 区内にある。

第 IV 区画は第 III 区画を 10m 方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を a ~ j、横軸を 1 ~ 10 に区分したものである。例えば、今回調査区の 1 区は C6-15-14L-1e はじめ、10e・1f・10f などと表すことができる。本文中の北は座標北を示す。磁北は西に 6° 38' 振る。

検出された遺構は平成 22 年 1 月 8 日に航空写真測量を実施、1 / 20 で迅速に図化した(巻頭図版 1・2)。周辺の見通しが悪かったため、G P S 測量による 3 級電子基準点から調査区周縁に 4 級基準点を設けて実施、水準は東京湾平均海平面(T. P.)を使用した。

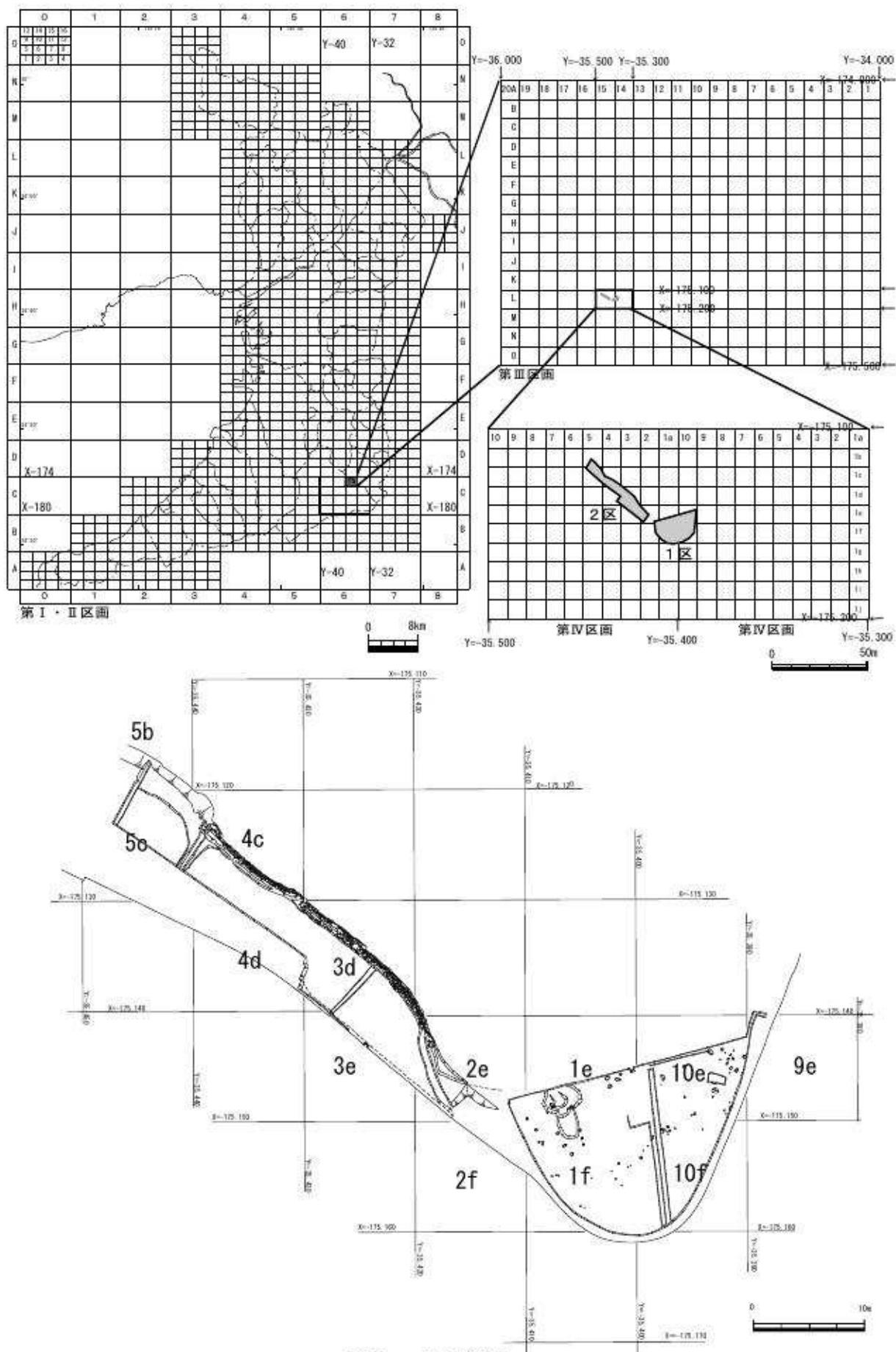


図3 地区割図

4節 基本層序

試掘調査で旧耕土（水田耕作土）と遺物包含層（水田床土）に覆われた地山上に遺構の切り込みが確認された。ただし、地山面の形成時期は定かでなく、山塊斜面の崩落や地すべりによって地山層が移動し、その深層に本来の古代・中世の地表面が埋没している可能性もある。本調査は旧耕土までを機械掘削で除去し、遺物包含層を人力掘削して遺構の検出に努めた。また、山地との傾斜変換点にあたる2区で二ヶ所、地山下層の確認調査を実施した。

基本層序は水田耕土が黒褐土、遺物包含層である水田床土が暗褐土、地山が礫混じりの黄褐土・黄褐粘土である。1区・2区とも水田耕土は5YR2/1 黒褐色で、地山は10YR7/8 黄橙色に対応する。遺物包含層である水田床土は10YR6/1・10YR4/1などの褐灰色である（図4・図版2）。

遺物包含層である水田床土はいくつか分層でき、層の境で遺構面の有無を確かめながら人力掘削した。しかし、1区東半は耕土を機械掘削するとほとんど遺物包含層が形成されず、削平を受けた地山面であった。その他の調査部分でも灰砂土・赤褐砂土など、地山深層部分を客土して薄い整地土を形成している部分もあった。

上層遺構面は水田床土①・②の層界で、溝の切り込みが見られたものである。上面はかなり削られ、溝の下半が残るのみである。下層遺構面は、1区が淡褐粘土、2区が黄褐土の地山上面である。

水田耕土は現在の水田耕作に伴うもので、厚さ0.1m前後である。その直下に厚さ0.2~0.5m程度の水田床土がある。1区は西側ほど水田床土が厚く、地山は東から西に緩やかに低くなる。2区は北側に水田床土が厚く、地山は南から北に急峻に低くなる。

また、地山はしまりが悪く、水分を多く含む。握りこぶし大から人頭大以上の角礫を多数包含する。角礫は風化した花崗岩が大半である。表面が剥離、結晶の崩壊したものが目立つ。洪積層によく見られる流水作用で角が丸まった礫はほとんどない。これらの角礫は水田開発の際に集積され、2区北側では石垣として積み上げられるなど、再利用されている（図版5）。したがって、本来の地山面は水田の拡張などで激しく削られ、旧地形も大きく改変、地山深層の角礫まで掘り出されているようだ。

特筆すべきことがある。調査地は晴天でも午前中の3~4時間しか日光が当たらず、一日の大半が山陰になる。調査は冬季で、日中でも氷点下になることが多く、午前中は地面の凍結が日常的にあった。地山面であっても水分を多く含み、一週間ほど放っておくと凍結と溶解が繰り返され、表層0.1mほどは遺物包含層のように変色し、明瞭な層界を示した。水分の凍結・溶解が著しい表層部分とその作用に至らない深層部分の差で、壁面の表層部分は自然に崩落していく。表層部分は砂粒の移動や土層の膨張が顕著で遺物包含層が自然に形成される過程のひとつが垣間見られる。また、土坑や溝の肩が自然に崩落して不定形になる原因もある。

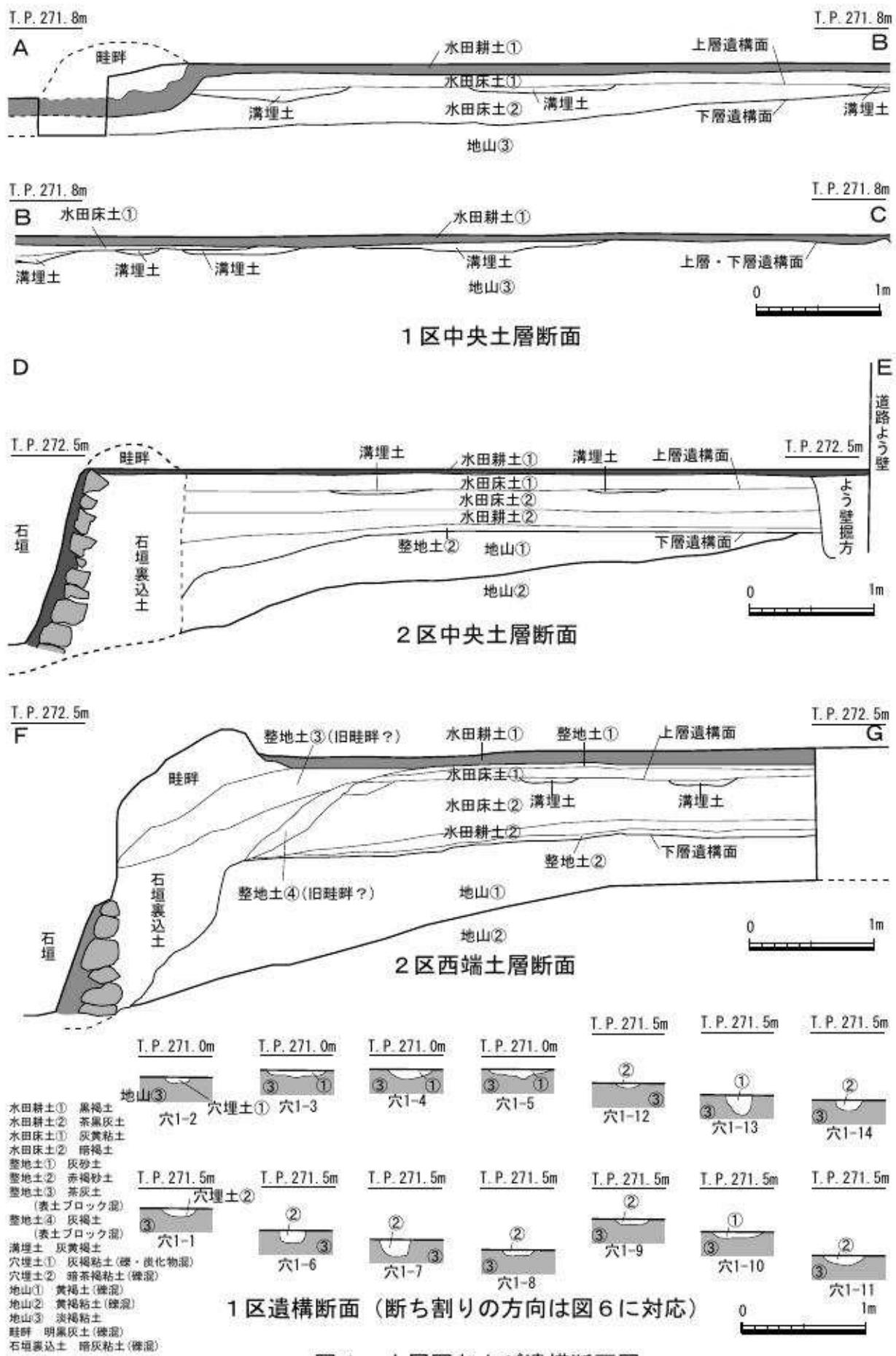


図4 土層図および遺構断面図

第Ⅱ章 調査成果

1節 1区・2区上層の調査(図版3・4)

調査は水田耕土を機械掘削で除去したのち、人力掘削で遺物包含層を一層ずつ掘削、遺構面を確かめながら実施した。水田耕土下、層厚約0.1mの水田床土を除去すると、ほぼ平坦な面があり、耕作溝が波板状に連続する形で検出された。上層遺構面と呼ぶ。1区はほぼ南北にならんで5本以上の溝が、2区では地形に沿って2本以上の溝が確認できた。溝群は浅く、途切れがちである(図5)。

1区遺構面は西端が落ち込む。この落ち込みは水田境界による段差である。経年で畦畔が西に移動、拡幅されているようだ。

2区遺構面の北側も崖となって落ち込み、約1mの比高差をもつ。崖面は地山の自然礫を積み上げた石垣として、流土を防いでいる。1区の段差と連続するものだろう。石垣の上面はほぼ遺構面に達することから、遺構面と石垣の形成時期は対応すると考える。溝の上面で近世～近代の陶磁器片がいくつかみられた。遺構面の時期を示唆する。

溝群は幅0.5m、深さ0.1m前後で、溝の上半は削られている。水田耕作に伴う唐鋤の痕跡には幅が広すぎ、畑の畝の低い部分のみが残されたものと考える。付近では江戸時代後期より商品作物として茶の栽培が盛んだった。今回発見の遺構も、この時期の茶畑の痕跡を示すものかもしれない。

2節 1区・2区下層の調査(図版5～10)

上層遺構面から約0.3m掘削すると、平坦面が検出された。2区では平坦面直上に赤褐色の山土による薄い整地層があり、層界は明瞭だった。1区の平坦面は西になだらかに傾き、南端で土坑・穴などが発見された。2区では顕著な遺構は見つかなかった(図6)。

土坑は1区で2基見つかった。土坑1-1は東西3.6m・南北3.0m以上、深さ0.5mを測る。東側は土坑1-2に接し、西側は調査区外にのびる。土坑1-2は東西2.9m・南北1.8m、深さ0.1mを測る。ともに遺物は発見されなかった。両土坑は埋土に表土の黒褐土ブロックがまじり、水田開発以前の風倒木痕跡の可能性もある。

穴は土坑の周辺で14基見つかった。いずれも小規模で、円形のものと不定形のものがある。深さは0.1～0.2m程度である(図4・6)。このうち、穴1-2・穴1-3・穴1-4・穴1-5・穴1-10・穴1-13は埋土が灰褐粘土で大量の炭化物と礫破片を含む。他の穴も礫混じりの暗茶褐粘土が埋土である。水田開発時に地山の礫・岩を抜き取った痕跡かもしれない。抜き取る際、岩上で火を焚いて割る場合があり、炭化物や礫破片の埋土混入が、それを裏付けると考える。

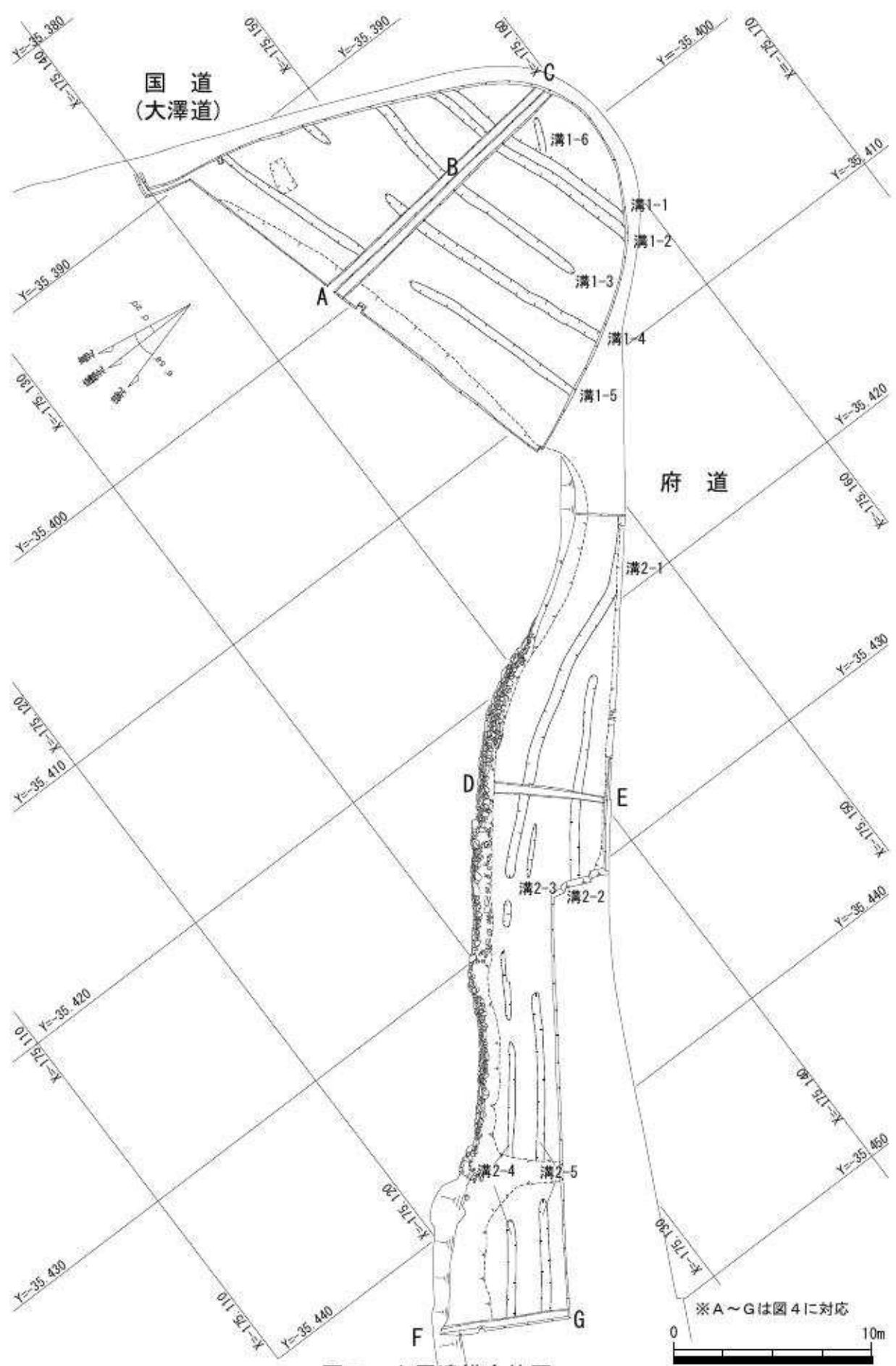


図5 上層遺構全体図

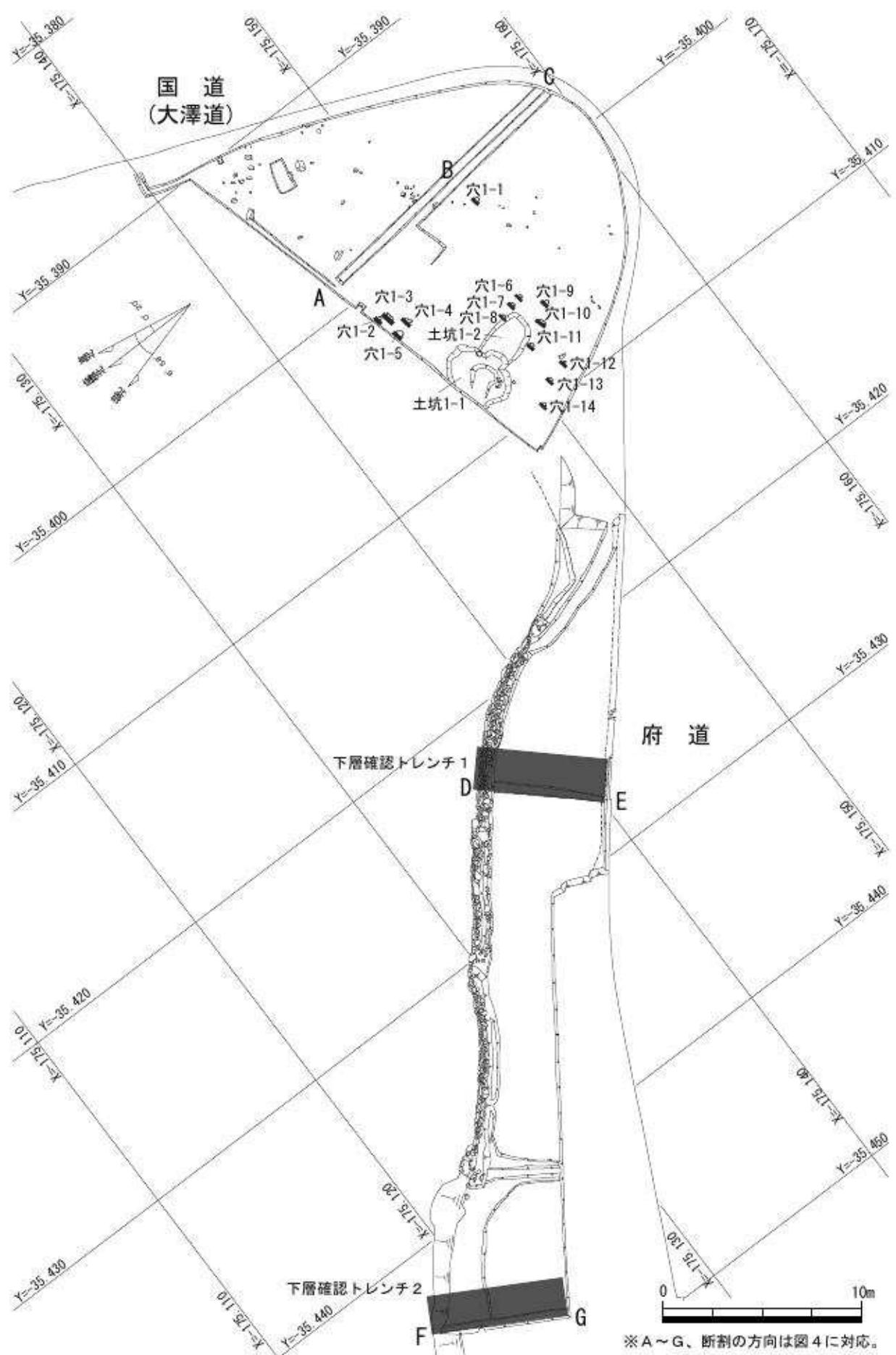


図6 下層遺構全体図

3節 出土遺物(図版 11・12)

出土遺物にはサヌカイト製剥片石器(図7)、土師質土器・瓦質土器・陶磁器がある(図8)。いずれも小片で構成するものはない。1・2区あわせてコンテナ1箱の出土で、概して南北朝期の遺物が多く、2区での出土が目立つ。

サヌカイト製石器は最大長4.5cm、最大幅2.3cm、厚さ0.7cmを測る(26)。自然面ではなく、縦長の剥片をそのまま利用し、側面の一箇所が集中的に刃潰れをおこす。使用の痕跡である。風化が進み、全面灰白色で、縄紋時代、またはそれ以前と考える。府内でも比較的高所から発見された剥片石器である。石見川沿いに金剛山を遡り、狩猟・採集していた人々の生活痕跡がこの地域に及んでいたことがうかがえる。

中世の遺物は羽釜やすり鉢などの調理具と碗・皿などの食器がある。小片が多く、細部の特徴を欠くが、いずれも南北朝期のものと考える。1300年代の一時期、調査区周辺に住居があったようだ。また、中国製磁器の出土は居住者の社会的身分を復元する上で重視できる。

土師質土器には皿(1~8)と、羽釜(16)がある。土師皿は直径5.9~10.4cm、器高1.1~1.5cmを測る。概して小型品が多く、すべて、明赤褐色である。地元で焼かれたものだろう。

羽釜はつばの部分の小片でススが付着する(16)。つば以外にも体部の小片がいくつかある。

瓦質土器には碗(10・11)とすり鉢(17・18)がある。瓦器碗は直径10cm前後を測る。底部の残存するものはなかったが、小型で高台が省略された末期のものと考える。

すり鉢は焼きが甘く、灰白色である。すり目は密に施されるが、使い込まれて凹凸はほとんど失われている。外面は指ナデの痕跡が明瞭に残る。

陶器には備前焼壺がある(12)。底部の小片で器形はよくわからない。内面にロクロ目が明瞭に残り、鉢ではないと考える。底部外面に糸切り痕跡が残る。

中国製磁器に青花(9)と青磁(13~15)がある。青花は江西省景德鎮産の小皿と考えるが小片で全形はわからない。内面に菊花があり、外面に低く細い高台をもつ。高台内面にも透明釉が塗られ、目跡が残る。器壁は0.3cmと薄く上質である。

青磁は盤と碗がある。盤(13)は灰白色の胎土に緑白色の釉が厚くかかり、浙江省龍泉窯産と考える。口縁部に段があり、端部を直立気味につまみあげる。直径約20cm、器壁は0.9cmと厚い。

碗も灰白色的胎土に青緑色の釉が厚くかかり、浙江省龍泉窯産と考える。外面に装飾がない一点(14)は器壁がやや厚く、口縁端部を丸く仕上げる。外面に蓮華紋を刻む一点(15)は器壁が薄く、口縁端部が尖り気味である。前者は直径11.2cm、後者は直径

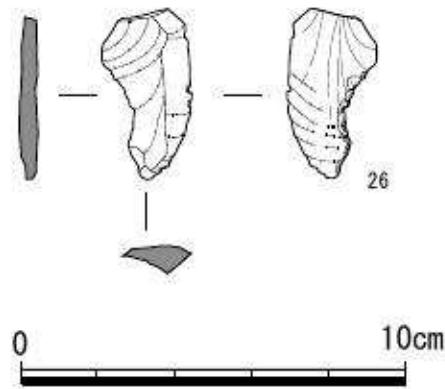


図7 サヌカイト製剥片石器 (1/2)

13.0cm を測る。後者の外面に施された蓮華紋は写実性が失われ、幅約 1cm と密になり、硬直化する。砧青磁の中でも南宋後期にくだるものと考える。

近世の陶磁器には肥前磁器と陶器がある。近世の遺物は小形の食器ばかりで、集落からの廃棄品というより、農作業に伴う食器であろうか。

肥前磁器は碗の小片で外面に草花紋が施される(20)。1700 年代以降のいわゆる「くらわんか碗」と考える。

陶器は産地が明瞭でない。碗は内面の透明釉を蛇の目釉剥ぎするもの(23)と透明釉を剥がないもの(21・22)がある。蛇の目釉剥ぎのものは外面底部が無釉で削りだし高台である。1700 年代以降の唐津焼だろう。

皿は内面に透明釉がかかり、外面は無釉である(19)。灯明皿などの小皿で、1800 年代のものだろう。近代にくだる可能性もある。

鉢は体部の小片で内外面共透明釉がかかる(25)。瀬戸産か。

土瓶の体部と思われる小片は内外面に褐釉がかかり、胎土は暗灰色である(24)。蓋の受け部は無釉で段をつくり出す。外面には刺突紋があり、器壁は 0.3cm と薄い。1800 年代のものだろう。

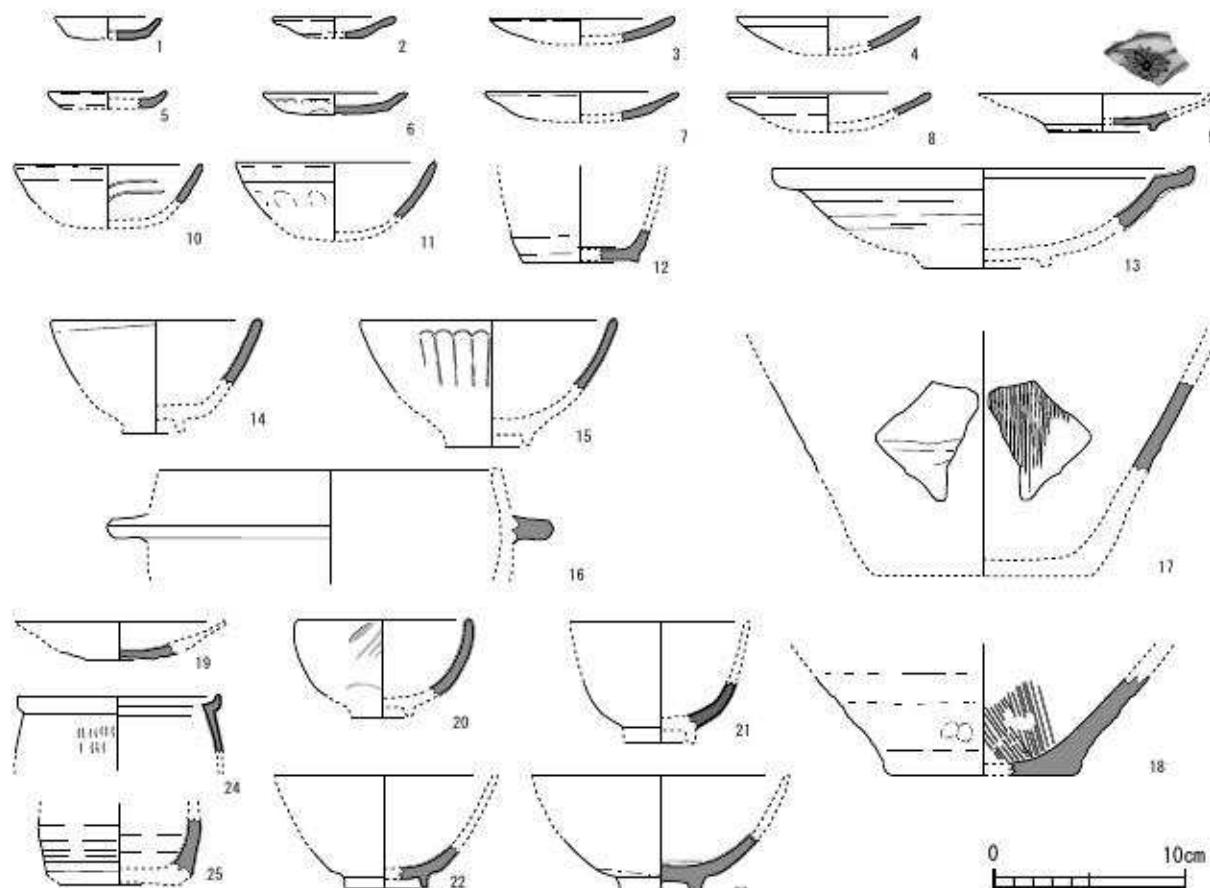


図 8 出土遺物 (1/4)

第III章 まとめ

奥田井遺跡は大澤道沿いの平坦面を耕地化した生産遺跡である。耕地化に伴う居住域の解明、開発の開始時期と耕地の変遷などが明らかにされることを期待した。つまり、観心寺による莊園化とその盛衰の手がかりを得ることであった。

しかし、今回調査では居住域や莊園開発の時期を明瞭にすることは出来なかった。ただし、調査区周辺は南北朝期には水田化されていたようで、同時期の羽釜・すり鉢などの調理器具と碗・皿などの食器が複数見られた。小規模ながら一時期は住居があったようだ。この地に暮らした人々が山間部のわずかな水田耕作以外にどのような営みをもっていたのかはわからない。南北朝期の該当地域は南朝の砦と化し、北朝と戦闘を繰り広げた地域でもある。耕地以外に特殊な施設があったのかもしれない。発見された中国製磁器はそれを示唆する。

あわせて、一点ではあるが、剥片石器の出土は縄紋時代の狩猟・採集活動が金剛山麓の高地に及んでいたことを示すものとして評価できよう。これについても、この地に縄紋人の定着があつたかどうかの結論はさらなる資料の増加に期待したい。

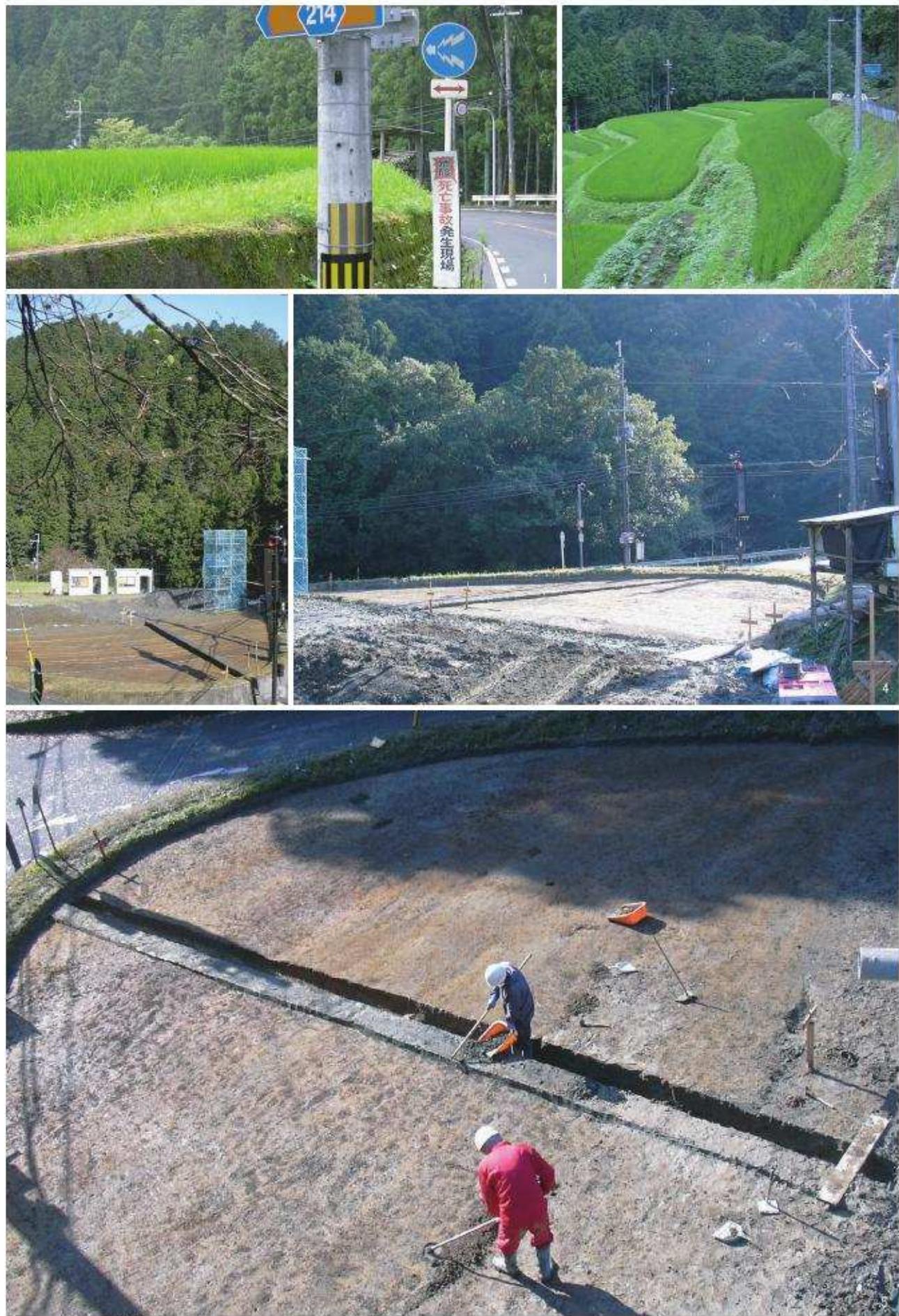
掲図番号	図版番号	実測番号	出土地区	出土位置	器種	時期
1	11下	11	2	表土	土師皿	中世
2	11下	27	2	暗褐土	土師皿	中世
3	11下	7	1	暗褐土	土師皿	中世
4	11下	5	2	暗褐土	土師皿	中世
5	11下	16	2	暗褐土	土師皿	中世
6	11下	6	2	暗褐土	土師皿	中世
7	11下	19	2	暗褐土	土師皿	中世
8	11下	14	2	暗褐土	土師皿	中世
9	11上	12	2	表土	宗徳鎮系染付磁器	中世
10	11下	17	2	暗褐土	瓦轆楓	中世
11	11下	22	2	暗褐土	瓦轆楓	中世
12	11下	1	1	表土	備前焼	中世
13	11下	26	2	暗褐土	青磁鉢	中世
14	11上	8	1	暗褐土	竜泉窯系青磁碗	中世
15	11上	24	2	暗褐土	青磁碗	中世
16	11下	10	1	暗褐土	土師質土器羽釜	中世
17	11下	25	2	暗褐土	瓦質土器すり鉢	中世
18	11下	18	2	暗褐土	瓦質土器すり鉢	中世
19	11上	2	1	暗褐土	京焼系陶器灯明	近世～近代
20	11上	23	2	暗褐土	肥前磁器碗	近世
21	11上	21	2	暗褐土	陶器碗	近世
22	11上	15	2	暗褐土	陶器碗	近世
23	11上	4	2	暗褐土	肥前陶器碗	近世
24	11上	3	1	暗褐土	京焼系陶器土瓶	近世
25	11上	20	2	暗褐土	瀬戸・美濃焼陶器鉢?	近世～近代
26	11	13	1	暗褐土	サヌカイト剥片石器	縄紋時代
	11下	9	1	暗褐土	土師皿	中世

図9 実測遺物対照表

図版



図版1 調査着手前と調査状況



1～2 調査着手前 (2009年6月) 3～5 1区上層造構検出状況

図版2
1区・2区土層



1



2

1 1区中央土層（南から） 2 2区西端土層（東から）

図版3 1区上層・下層全景



1 1区上層全景（北から） 2 1区下層全景（北から）

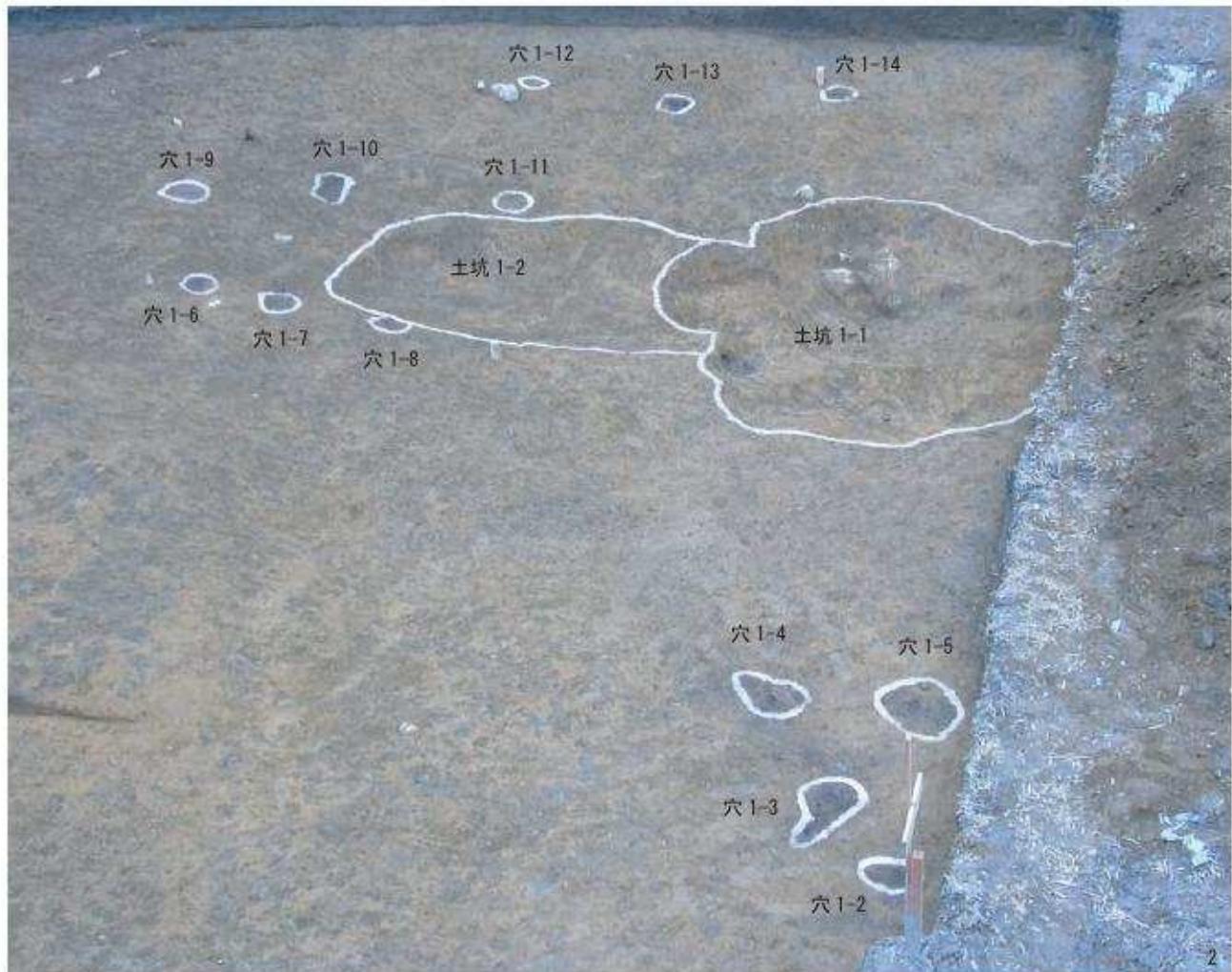
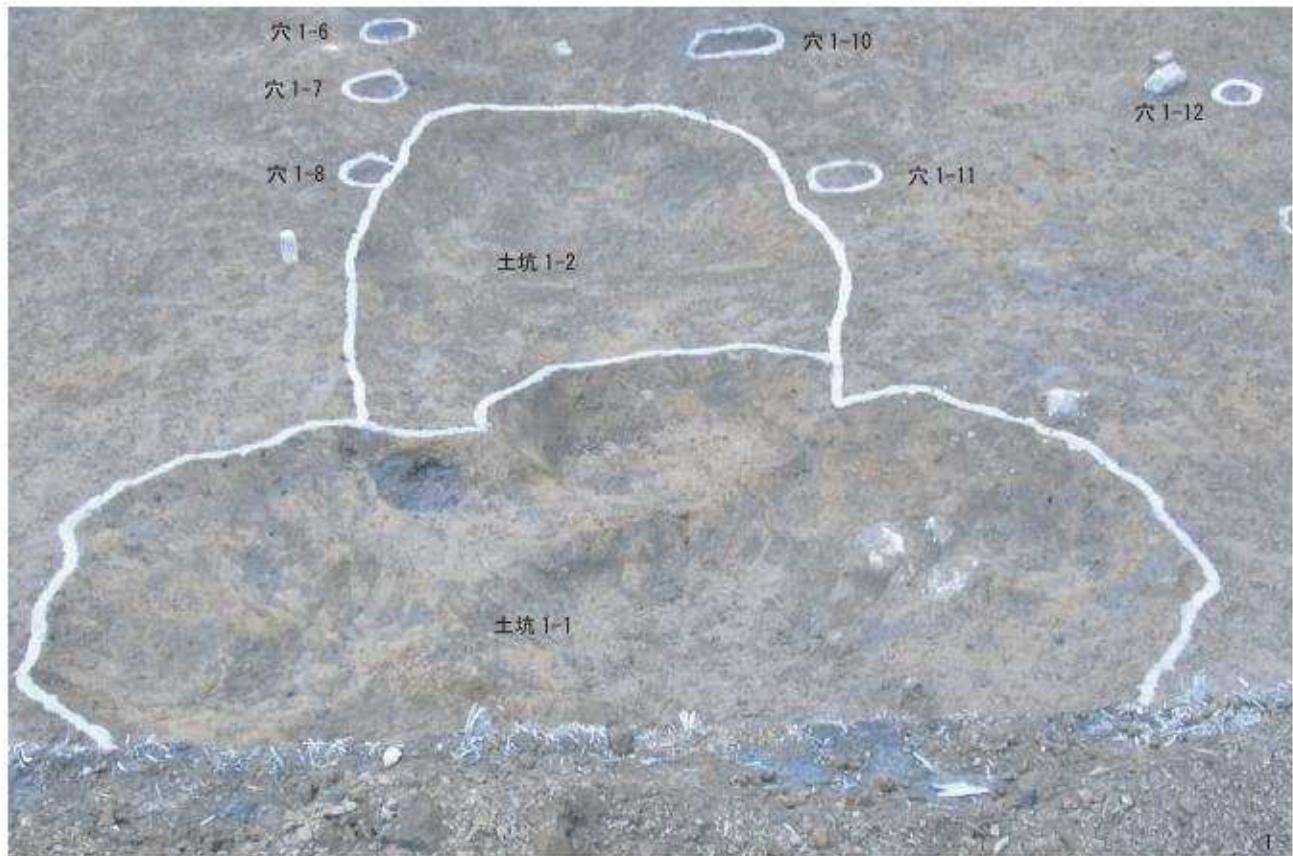
2



1 2区上層全景（東から） 2 2区上層全景（北から）



図版6
1区下層遺構群1



1 1区下層遺構群（西から） 2 1区下層遺構群（北から）

図版7 1区下層遺構群2



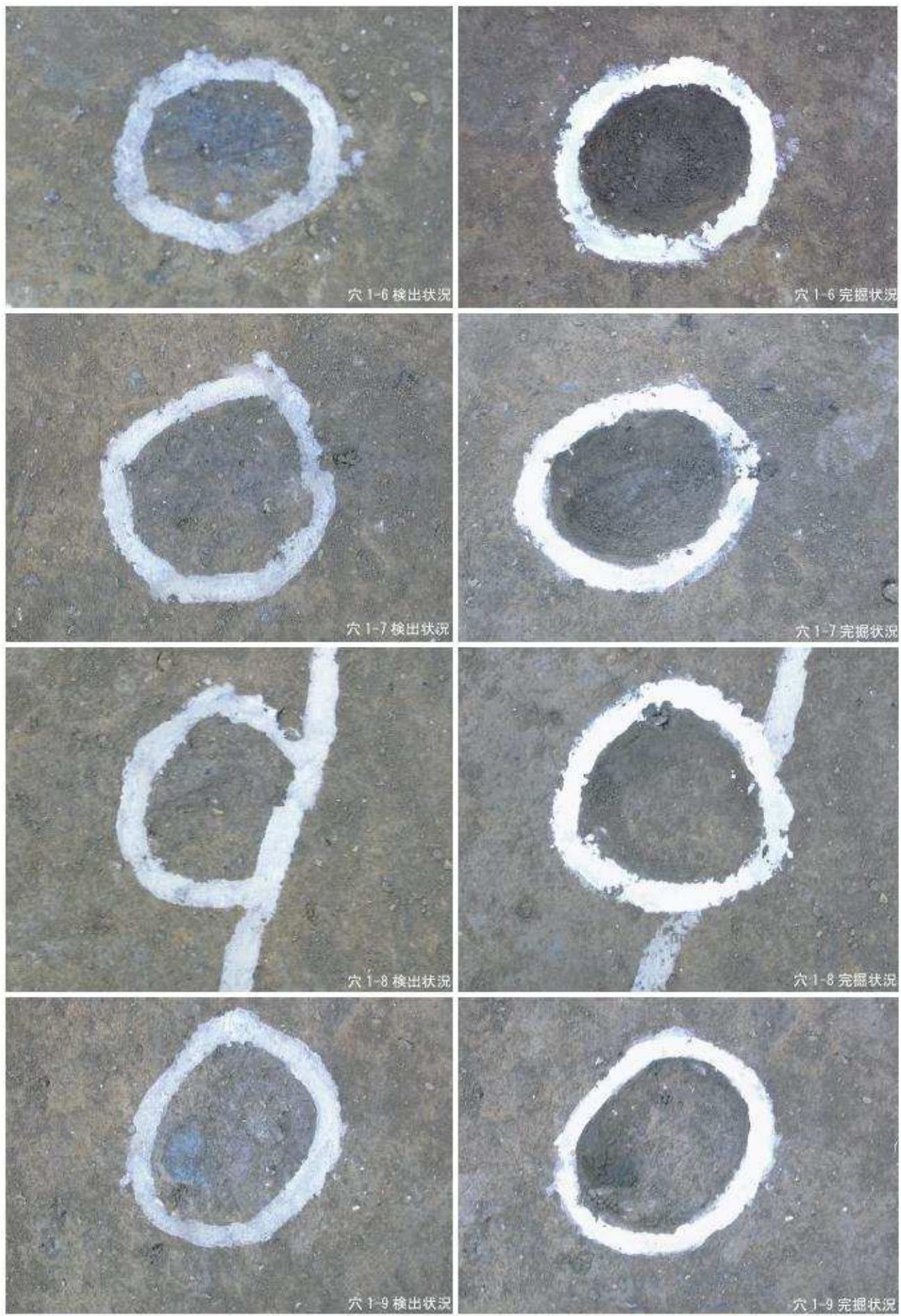
1



2

1 1区下層遺構群検出状況（西から） 2 1区下層遺構群完掘状況（西から）

図版8
1区下層遺構群3



左 1区下層遺構群検出状況（西から） 右 1区下層遺構群完掘状況（西から）

図版9 1区下層遺構群4

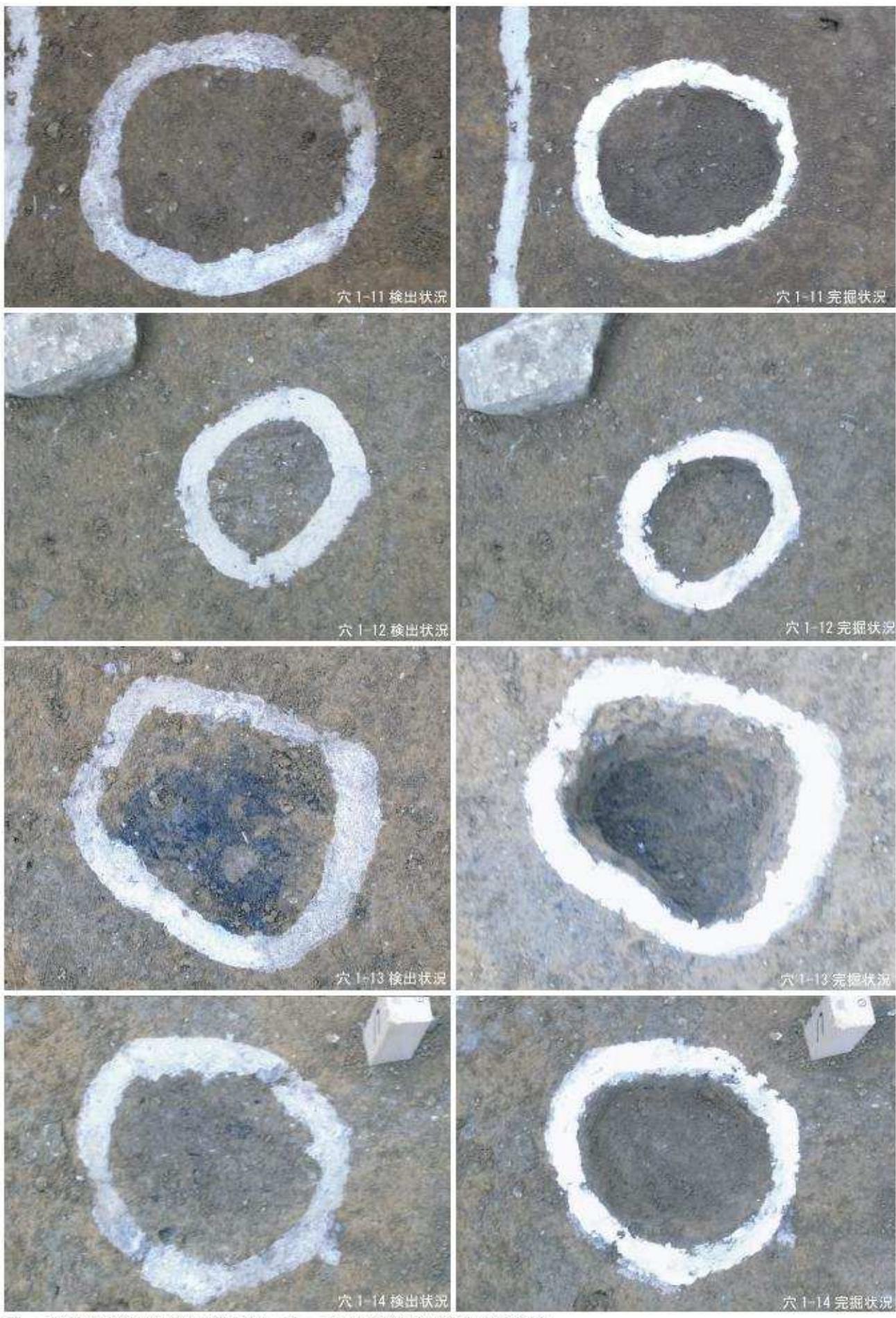
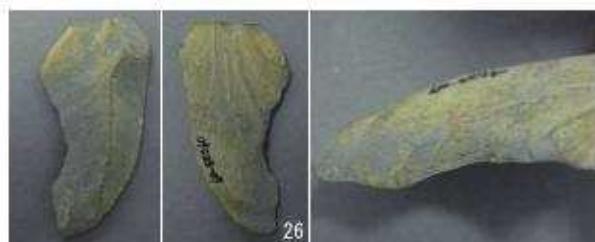


図10 2区地山確認アレンチ



1 2区Aトレンチ（北から） 2 2区Bトレンチ（北から）



ナスカイト製剥片石器と刃潰れの部分



図版12
出土青磁復元



報告書抄録

奥田井遺跡発掘調査概要 I

発 行 大阪府教育委員会
〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目
TEL06-6941-0351 (代表)

発行日 平成23年3月31日

印 刷 石川特殊特急製本株式会社
〒540-0014 大阪市中央区龍造寺町7番36号